

南天莊歌稿



160
148

160-148
1200800012693

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

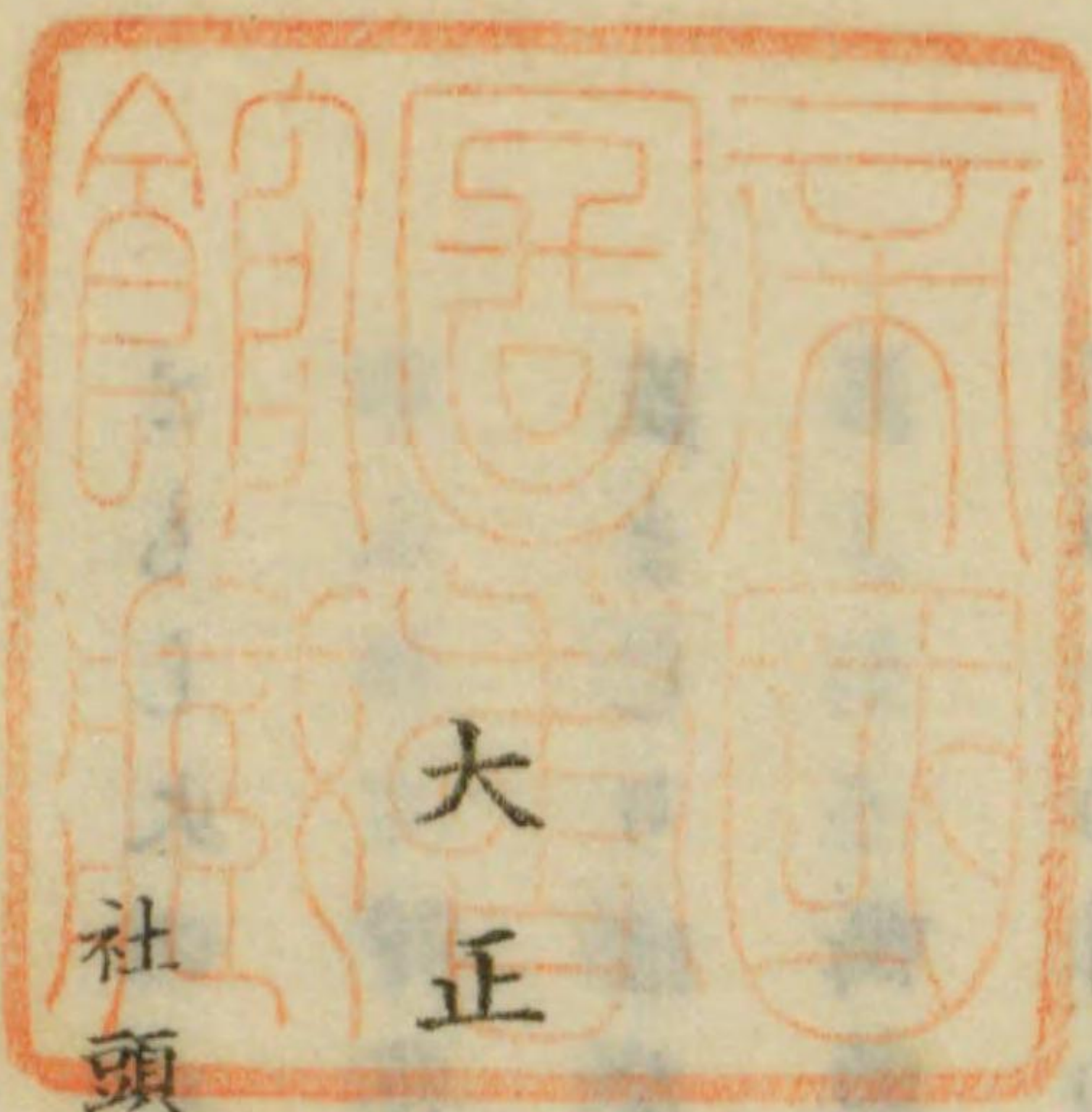
© Kodak, 2007 TM: Kodak



南天莊歌稿

160-148

南天莊歌稿



大正三年

社頭杉歌御會始詠進

井上通泰

作



神はしをわたるはふりがしろたへの袖こそみゆれすぎの木間に

野外霞

春がすみふかきゆふべに花よめをのせたる馬の野をすぐるみゆ

落花

山ざくら三も四もこの木末よりいかでかばかり花のちるらむ

春島

人くらふたにのすみかこたれか見むかすみたなびく春のしま山

春闇

ごもし火のかけをや花もしたふらむやみの空より憲にちりくる

大 卯花

蓋まじりはなびらちりてひこばえもまだらにみゆる垣のうの花

鴨頭草

夏のよの月のひかりにさゝの葉をつちにゑがける庭のつゆくさ

月前菼

月たかきひろ野の原のくさむらをみなあき菼ごきくがゆかしさ

稻

高しほをからくのがれしこよろぎの磯田のをしね色づきにけり

蜻蛉

ゆふ日さす道のゆく手の土にゐて赤きあきつの身じろぎもせぬ

秋鳥

色づけるあさちが原にきえにけりいまむらがりてたちし小鳥は

初雪

雪ふれば又めづらしくたもふかな年のやこせも見ぬもののごこ

馬上雪

庫のかけ白くうつれるにこり江の荷船のひまをかもめこびかふ

杖

わらはべのすまひあそびを傍に見る子のあはれつゑによりたる

機

たるはたの音ぞきこゆる屋の上になづなむひたるかむなぎの宿

繩

ほり川のゐぐひにかゝるなはぎれに飾れるごこく玉藻つきたり

塵

をりをりはたのが袖をもはらはなむちりにまじりて道をこく人

烟

数しらずけぶりたちたつなには津のいつくむかしの大宮ごころ

光

たほ空の星ぞわらはむきらめくこみるまにきゆる人のひかりを

戦

方わきてわらはのまねぶたゝかひも勝つはかならず皇軍ミイクサにして

山櫻帖

いたづきてほり集めたる山ざくら百こせふごも世にはちらすな

をりにふれて

こゝろざし合はぬが多くなりけり我やひがめる人やまごへる

人の手の玉をかたみにこぼちつゝ世に玉なしこいふがあやなさ

わい人こつまはじきするわい人のなからむのちの國いかならむ

大正四年

海上春風

すさまじきここもよそにはきこゆれど御國の海ははる風ぞふく

曉鶯

むら山の尾上にはひてもや深き富士のすそ野にうぐひすのなく

月夜訪梅

かさねたるあぐらの上に月さえてうめのはやしは人かげもなし

汐干

こなたのみ汐はひぬらしうみごしのむかひの山は波ぞひたせる

牡丹

たぼしまによる人みえず春ふかきにはのぼたんにはひるの風ふく

雨中新樹

ふる雨に水はにこれるそま川のきしのわか葉のいろのさやけさ

綠蔭

夏の日のくるまやごりごなりにけりはひりの庭のしひの下かけ

葵

かみ山のふた葉あふひもよし知らぬ人ははかなき草とみるらむ

梔子花

水ましてかはらもみえぬたほ河の岸のふせ屋にくちなしのさく

朝顔

旗たてゝみゆきむかふるしづがやの垣根うつくしあさがほの花

川夕立

音たてゝ河原をたゝくゆふだちにみなわながるゝ石かはのみづ

松風涼

百尺のまつのかげにたちよればふくかせすずしあまつ風にて

風鈴

風かよふ軒端えらみてわぎもこがかけたる鈴のなるゆふべかな

夏澤

夏澤

わか葉たほひ藻の花さきて人しれぬことありげなる山さはの水

菊花初開 天長節詠進

たほまへにけふさく菊はやま人の君にさゝぐるちこそせなりけり

紅葉一枝

瀧のうへのはじのひこえだひこ山のこれぞしたでる始なるてふ

行路蟲

十日あまり三かのみこもにつかへつゝ路にてきゝし蟲の聲はも

初冬

木葉やくしろきけぶりの末ふして刈田のおもにきゆるさびしさ

庭落葉

やま寺はかよひ路もなしたほ庭を黄なる木葉のふりうづみつゝ

暮靄

田のもよりむらむらたこる夕もやにみえずなりゆく里のたか村

深山

しら雲にたき火しめりてあかつきのさむさ身にしむ山の奥かな

境

からたちの垣根ひこへぞ辻やしろかみご人のさかひなりける

古戰場

はらからの鬨ぎし跡はさもあらばあれ千代に傳へむちよの松原

明治天皇

御跡たひし臣をかたへに侍らせて此世のさまをみそなはすらむ

菅原道真

たくひつゝ世につたはりぬ大御ぞを君はぬぎまし臣はさゝげて

或人の菅公といふ題にて「大海のふかきこゝろはありな

がらなごひき汐のしられざりけむ」ごよめるを見てよみ

て示しける

ひき汐はしりも知らずも國のため身を思はぬぞやまごたましひ

猿

えぼしきて小猿のまふをみし外はたもひでもなしわがをさな時

獵

のりの師が石うちふける山寺のうしろの峯につゝのたごぞする
 ひげのさま見てもしらぬ世の中はふたりみたりの心なりこは
 あめの下くにてふ國をてらすべきあまつ日かげぞ今さしのぼる
 日本石油會社より奉る寫真帖の題詞
 春花のさかゆる御代をくさ水もしたにしりてやわきまさるらむ
 山縣公の七十八の賀に
 世のさまを思ふにつけてひたすらにねがふは君が千年なりけり

大正五年

寄國祝歌御會始詠進

百やそこ國はあれごもごしごしにさかえのみゆくくにはわが國

社頭鶯

市なかはたい木ごもしみ神がきの外にうつらぬうぐひすのこゑ

雨後鶯

はるさめのはれぬる空にたつ虹ごあやをあらそふうぐひすの聲

社頭花

たい杉にまじるひこ木の山ざくらめぐしご神もみそなはすらむ

水邊櫻

垣ゆひてさざれつみたる川岸にさくやさくらのところせげなる

桐花

くもり日のさぎりつちはふ山畑にたかくそびえてきりの花さく

薄暮子規

くれわたる多摩の國原いく里のさもし火かけてなくほこぎす

梅雨晴

雲間よりゆふ日にほひてさみだれの跡ものすこきたほ河のみづ

夏夜

すずしげに星のひかりのきらめきてよるは空にも夏なかりけり

夏野

すな川の砂もこけよこてらす日にたほ野のちがや波こみだるよ

夏水

ゆあみして水やすてけむ垣根よりゆふべの月のかげぞひろがる

月夜聞蟲

富士のねは月夜の空にあらはれて伊豆もするがもただむしの聲

草花

たのがごちうちむらがりてこそ草をまじへぬ野べの秋くさの花

芙蓉

秋の日にさきほこれごもゆふ影をまたぬふようの花のはかなさ

君が世によるのにしきはなかりけり山のわくまで道のひらけて

晩秋

大きみのみあれいはふと年ごこに秋のくるるもしらぬ御世かな

暮秋山

目路ごほみただあを山ごみゆれごもいまやもみちの盛なるらむ

寒夜月

ふたつみつ空にまたよく星かげもさむさをそふるふゆのよの月

夜時雨

時雨ふりさむきよるごもしらじかごもし火あかき高窓のうち

初雪

月くらきよひの小みちのきり石にうひうひしくもつもる雪かな

爐火

たい人ぞむかをしをかたる石ずみのもえたつごこに面ほでりして

寒流

大いそはうめもさけるをさむげなる山きた川のいはなみのいろ

冬晴

日のもごのくぬちごごごはれぬらし時雨の雲の跡だにもなき

曉山

山のまはあかくにほひてほのぐらき峯ぞつらなるしのよめの空

森

大和路は田中にみゆるひごむらの森もよしあるみやしろにして

巖

うち仰ぐいはほの高さうつせみの世の人われのたけのみじかさ

朝海 天長節詠進

けさみれば海にうかべる舟ぞなきあまも体みて御世いはふらし

汀

かへりこぬふねをまつこて昔よりいくらの人のたちしみぎはぞ

夜聞水聲 小田原古稀庵にて

ふけゆけば箱根のやまの山みづの音もきこゆるこゝちこそすれ

禁中鶴

みそのふの御垣の外まで聞ゆなりさもゆたかなるあしたづの聲

晴天鶴

あめのしたみえぬ國なきたほ空に高くのぼりてたづぞまふなる

象

ならしやすきけものこのみや思ふらむ怒れる象を人はしらずて

鯉

みそちあまりむつのうろこの光には尾鱗をふせぬ魚やなからむ

古松

空たかきなみのひびきをきゝながら松の葉はらふ神のみやびこ

岸竹の心もたもた
 たかむらのひまよりみれば山がはのむかひの岸もたか村にして
 勇士の心もたもた
 のぼる日の御旗のまへにたつときは新附の民もますらをにして
 本居宣長の心もたもた
 國つ花さくらののはなのたましひやしばらく人ごあらはれにけむ
 耳の心もたもた
 ふたつある耳も足らずと思はましよき事のみをきく世なりせば
 眉の心もたもた
 白からぬ眉なかりけりたほきみのみゆきむかふとつごふたい人

点滴

ところどころ青き小石のあらはれて跡いちじろき軒のたまみづ
 漁火
 空と海とけちめもわかぬよひやみに星とつらなる沖のいさり火

芥

みなぞこにやごれる月をくもらせてあくたながるゝ市のなか川
 影

紫

ゆふ日さす畠のなかみち竹うまにのる兒のかけぞ長くうつれる
 紫
 きぬあらふすき影みえて垣のこにうすむらさきの水ぞながるゝ

山縣公を訪ひて

一たびはあやふくみえしわい松のよみがへりたる色のさやけさ

寄道懷舊鎌田正夫氏追悼

夜をてらすごもし火ひこつ又きえていよいよさびしき島の道

大正六年

遠山雪歌御會始詠進

くに界ふゆきのしら山あなたには日のひかりみぬ民やすむらむ

同

さがみなだのぼるあさ日に見さくれば雪に色ありふじの神やま

残雪

かぎろひの野べにたつまで残りけりつらなる山の雪の八十すぢ

竹裏鶯

たかむらのひまよりみゆるくれなるの旭の影にうぐひすなくも

野梅

水あさき野川のきしのさく生よりひごえだいでてうめの花さく

草もえたり

わか草のもゆるをみれば人ふまぬくまはありけり市のちまたも

花始開

事しげみうかがひもみぬには櫻さきぬといふにたごろかれけり

夕花
くれわたる里のいらかのひまひまに色いちじろき庭ざくらかな
春河
雪しろき山よりいでてうなばらのかすみにそよぐふじがはの水
海邊春月
わたつみの神の少女もあくがれてあらはれぬべきたぼる夜の月
暮春風
わか葉ふくけさのあさ風やまぶきのちりしくみればなほ春の風
瀧邊螢
ひるみてしたきのしら玉ぬば玉のよるはほたるの代りてぞちる

水雞

水の上にあしの葉みえてさよ深きたほかは淀にくひななくなり

團扇

音たかく鳴るこはすれご腰よわきうちにはは風をたこさざりけり

夏虹

神のたこはなほきこえつゝ浪くろきたほ河じりに虹たちわたる

夏夢

夏の夜をみじかきものこたれかいふ三こせに互る夢もみてけり

夏篋

たが家の瀧こたつらむなつやまのこぶかき谷にみゆるかけひは

叢中蟲

草むらになきし蟲のねその秋もはやいつとせのむかしなりけり

月出雲

仰ぎてもたれか見ざらむしら雲のさばりをいづるつくよみの神

馬上月

さかさまに駒にのらばやゆくかたの空には見えぬあきの夜の月

溪菊

わが見しやはじめなるらむ馬だにもなかぬ谷間のしらぎくの花

秋漢

杉やまのこのまの尾花いろあせてゆふ日さびしき谷のたくな

ものうさに僧はくだらず谷ふかきもみちを庭のさかひより見て

秋旅

ぬり笠にむしぎぬたれてやち草のなかをゆきけむ昔をぞたもふ

暮秋山

いはむろの苔もたち葉にうつもれてかまくら山の秋ぞくれゆく

残菊

しらぎくは花のやま人も草のかれにしのちもさきほこりつ

渡頭時雨

沼こすこわたしにたてば山あをきこなりあがたも時雨ふるみゆ

枕ごふたごを時雨ごさだめつゝさめたる目をもひらかでぞきく
 庭霜の庭さへしろきあさ霜に民のさむさやたぼしやるらむ
 雪中友來ごふかかな雪みむ爲に友は來つるを
 うづみ火のあたりへいざごさそふかな雪みむ爲に友は來つるを
 高山の峰はすくなかりけり
 山たかくのぼりてみれば雲の上にてたる峰はすくなかりけり
 山村の家に
 ひご谷にわたるやまごご三つごだに軒をつらぬる家はなくして
 積り

河ごいふこゝちこそせねいし原のこころごころに水のながれて

都

ごしごしに廣ごるみやご葛飾も多摩もむかしの名ごぞなりなむ

神

さかき葉はよその國にもありごきくゆきて教へよ神まつるすべ

嶺松天長節詠進

みねたかき松のこずゑに風たちて空よりくだるよろづ世のこゑ

幼児

をさなごはゆふだちの雨さよしくれ怒るも啼くも東の間にして

和氣清麿

ひこ言に國をさだめしここのはのさながら史にのこらましかば

豊太閣

日のてらす國のかぎりを大君にさゝげむここやねがひなりけむ

辨財天

いたづらに抱くよつの緒世の浪のしづまりはてむ時やまつらむ

烟

あくた火も桂たく火もたち昇るけふりをみればかはらざりけり

赤穂郡誌題辭

いたづらに國ぼこりせていにしへの人のあこふめのちの世の人

史可法の遺墨のしりへにかける

もろこしの調ツキの伊イ企キ儼ナがをたけびのこゑもこもれる筆の跡かな

日本石油會社の事業をほむる歌

まごころは底つ磐根もこほすらし富のいづみのわきまさりゆく

東伏見宮の御賀に寄松祝といふことを

たほけなくかぞふべしやはしら雲の上にそびゆる松のよはひを

山縣公の八十の賀に

あふぎみる人はつきつきかはれども松はいまなほ雲にうそぶく

大正七年

海邊松歌御會始詠進

すなきよきいそのまつ山あだ波のこえしためしはなき國にして

同

まつあをき浦をしたひてあきつしまよもの海より波ぞよりくる

江柳

この春も千すぢのいさをかけてけりふる江の柳たころへずして

朝雲雀

むぎ畠のごほき果よりのぼる目のにほひのうちに雲雀なくなり

夜花

小ぐるまの火にてらされてつぎつぎに堤のはなの闇をいでくる

池邊藤

むらさきの雲よりたりにて蜂ひこついけのみづ吸ふふちのはな蔭

若葉に雨ふる

かへるでのまだ縁にはそめあへぬわか葉ぬらしてふる小雨かな

小田原なる古稀庵にて

伊豆の海なま島かけてふくかぜを真袖にうくるけふのすずしさ

くれゆく庭に蟲なく

何こいふ蟲かしらねごまづひこつなきはじめけりゆふぐれの庭

桔梗

まくさかる里の青年の目をひかぬききやうも時と咲すさびけり

旅中月

やれぐるま馬にひかせて月さほきひろ野をわたる影のさびしさ

寒樹

冬がれのこずゑみるにも北の國のたのむ蔭なき民をしぞたもふ

川水鳥

山ちかみなかばかげろふたほ川の日なたにむれて鴨ぞあそべる

旅山雪

たうげよりみゆるうな原うなばらの路はやすけむ雪のつもらで

吹雪

ただむかふ佐渡の島根もかききえてふぶきにあるよこしの大海

禁苑春近

天つ日のひかりにちかきみそのふはまだ冬ながら梅もさきつよ
うぶすなの杜の山もよふる里ははかなきこころもこひしかりけり
峯つづきみちぞつきたるしら雲のほかにもかよふ人やあるらむ
いかほ嶺にたちて見さけしこね河のたもかげうかぶ庭のやり水
さぶらひてあるじまつまのしづけさに聞ゆる庭のやりみづの音
新居

古きをもわすれぞかぬるにひ室は人のいふごごすみよかれごも
 漁舟
 陸にしてはるかにみればますらをの鱗つく舟ものごけかりけり
 軍艦
 いくさぶね港いでゆくをくしさに泣きし人さへよろづ世よばふ
 鈴
 ふる言をさきのいごまにすずふりて神代のをきくし人はも
 篠
 いく時ののちにかいでむしら雲を目あてにわくる野路のしの原
 墨竹

ゑだくみのこゝろにうつる影ならし寫せる竹のみごりならぬは

舞樂

いはひてやみ國のまひご定めけむこまもろこしを右にひだりに

家庭教育

わが家のはのをしへはむほきみの御楯ごなれの外なかりけり

山縣公の誕辰は六月十四日なるをこごしは時局に憚り

祝宴を止められしに同月十六日に常磐會例會を開か

れしかばその席上にて人々八十に満ちたまひし喜の歌

をよまむこいひ合せてよみしによめる

をこつ日か生れかはりしさらに又やそち經ぬべくみゆる君かな

唐津の人河村藤四郎翁の隱宅の成りしを賀して
名のみきく虹のまつばら君がすむあたりを空に糸がきてぞ見る

獨嘯

こむ世とてしる人ありやしらねどもありと定めてこむ世をぞまつ
をりにふれて
知られぬぞこゝろ安きをあらはれむここのみ人のなご願ふらむ

大正八年

朝晴雪歌御會始詠進

あを海のをちのゆきさへてらすらむ御國の空にあまるあさ日は

同

ゆるされてかへらばかたれ雪にさす朝日めでたき國のひかりを

残雪

いつふりし跡ぞこしばしたごるまで久しく野べにのこる雪かな

待花

まちわたる人の心のうへにいでてさけかしさくらこよひ一夜に

雛祭

たてまつるしろ酒くさ餅もよの花糸み榮えたるわ子も見まさね

春夜

こごころの鈍りやするこ大刀ぬきて火影にぬぐふ春のよはかな

渡春雨

はるさめのふる日まちてやわたし守花をうがちし嵩はほすらむ

春祝言皇太子殿下御成年式詠進

桃やまの神のさだめし三千とせのためしひらくるはるぞこの春

都初夏

みづ鳥の沼にすだきしむかしよりのこれる杜もわか葉さしけり

水鶏

あし蔭の水のみひかるよひ闇になくはくひなかきよは知らねご

蝸

風わたるくず原岡のひろまへにぬかづきをればひぐらしのなく

贈扇

百くさの言のこもれるさくら花あふぎのあやこねほろかに見な

松間紅葉 天長節詠進

大みやのまつのこのまに錦かもはれるこみればもみぢなりけり

秋水

あしべよりひろごる波もみだれずてあきの日しづく山さはの水

寒夜月

たく霜のしろきまなこに人をみてしたしみがたきふゆのよの月

曉霜

あかつきのちまたの霜は世わたりの道にいでたつ人のみぞふむ

古寺雪

奈良の代のまゝなりこいふあらゝぎにあすきえぬべき雪の積れる

冬花

こむ春にこゝろひかれてしほむべき時をわするなすゐせんの花

冬庵

雪ふかきいほをばいでじいでて世を三つにわかたむ力なき身は

細流

石ひこつ手して除けばたちまちに咽ばずなりぬあはれせゝらぎ

姉妹

いくばくのいはなが姫か昔よりうらめしき世をいこひはてけむ

いもうごをほむるをきゝて姉のためかつはふづくむたや心かな

窓

一ごせのちだにみえじもゝ里のほかさへ見ゆる窓ごほこれご
あたらしき風もいれてむをりをりはふる言まなぶ窓をひらきて

社頭雞

かみ垣のこりは神代にかへるらし社のこずゑにのぼりてもなく

鳩

血にそめるしらはごあはれたゝかひはなれご鳩ごたれか挑みし

羊

やせ犬にたはるゝひつじ一むれのなかの衆帥はいづれなるらむ

した草の刈らるゝをみてたい杉は利録のがれし世やしのぶらむ
綱
 いたづらに年のもゝせあふぐこもあまつ空より綱はくだらじ
讀書
 いつまでかふみはよむべき窓の外の外のうめき叫をよそにきゝつゝ
東伏見宮の御賀に寄竹祝といふことを
 弓さなり矢さなるたけの園なればゆみやの神もまもらざらめや

大正九年

田家早梅歌御會始詠進

都にはまださかずてふうめのはな芹にそへてやたてまつらまし
同

雪しろきむら山こほくはるゝ日にうめほころびぬ芽がさきの里

朝鶯

もりあかす衛士こなりてもきゝてしが大うち山のうぐひすの聲

谷梅

すぎ山のたに間の茅原チハラくまもたちず春の目さしてうめの花さく

雨後花

たつ虹のなゝつの色さかさなりてゆふ日に匂ふ八重ざくらかな

山路雑

いは室にすむらむ人のゆかしきに山路のきじよわれをいざなへ
若葉のころ山路をゆく
右手にみてすぎしふもこの池ならしわか葉の底に白くみゆるは

新竹

あを雲に枝をふるふかあらしにもいまだもまれぬ園のわかたけ

芭蕉

人三たりをらばをるべきばせを葉の廣葉の面をかたつぶりはふ

夏峰

峰たかくのばれば寒しなつ山もなからばかりぞすみよかるらむ

夏流

もろ人がながすあつさをもちいづる瀬たりつ姫の聲のさやけさ
杜かけの早瀬にたちて緑たるよその世わたりやすずしかるらむ

夏樹

全き葉も蟲にはまれてみえざりしさくらは更にみづえさしけり

初秋夜

宵ながらもものしづかにてあき風のこゑもきこゆる窓のうちかな

月夜に友をさひて

月はげにかがみなりけりたもかけにみしご友は月ながめをり

籬菊 天長節詠進

よろづ世を君にさしぐるやま人のつかひかこみる垣のしらぎく
 折菊
 いざやこの野ぎくををりて歸りなむあてなる花は庵にふさはじ
 庭紅葉
 日の御子の御旗むかへむくに原を庭のもみちにたもひやるかな
 冬湖
 雪しろき峯のたまきにかこまれて藍をたふふるやまなかのうみ
 曉雨
 市なかもいまださやがぬあかつきの耳にあちはふ雨のたごかな
 雨ちかし

いざ子ごも戸ざしかためむ雨ははや近き國までふり來ぬといふ
 古跡
 ごつ國にむかしの人ののこしたる跡ごめゆかなますらをのごも
 海路
 事なきをねがふ船路にたふかひをもごむるごこく浪のよせくる
 農
 田にたてば小田のますらを皇軍にめさるよごきは國のますらを
 孫
 いつまでか男さびせむをさなきがたほちごよびて我にむつるよ
 眉

目の上に常にゐれども目のあたごせられぬ眉ぞわれにまされる

西行法師

まつ山のなみ間の小舟しづみての後にごふごもなにかはせむ

戸

松くろき宵のうまや路しづがやの雨戸をもるよほかげこえゆく

軒

わら葺の軒をつらぬくはりがねにいにしへ今のあざなひを見つ

飛鳥

しら雲のむかぶすきはみ山もなきあら野の空をたほごりのごふ

蜘蛛

軒端よりはらひたごしてもちあぐる幕のすゑをさがるくもかな

小松

いたづらにこだかくならで柱ごもむな木ごもなれ野べのわか松

澗底松

谷ふかくひそめる松もうつばりをもごむる人の目やはのがれむ

池舟

をりをりはさをもさすらしふなばたに玉藻つきたり池のすて舟

焔

たほかたの石のもゆるかしら玉のやくるほのほか峯にのぼるは

樂

世のためにこゝろ碎きて事成りしそのたのしきは誰にかたらむ
 いにしへの奈良のみやこの跡さへば夢は穂にいで豆ははなさく
 佐紀野よりみなみの方を見さくればならの都ぞたもかげにたつ
 うかびにし寧樂のみやこの影きえてうつゝにみゆる畠なかの寺
 みつ山のあひあらそひし神の世にこゝろぞ返るかな路ゆくゆく
 畝火山東北御陵にまうでて
 大まへにけふぬかづきてさらに又やまごころをふり起しつる
 山縣公が京都より還られし後新椿山荘にて時鳥こいふ
 題を出して人々歌よみけるに

隣なき庵のねざめのほごぎすかはりし世にもかはらざりけむ
 輕井澤より貞子刀自のもて歸られたる草花を見て
 から松のはやしに月のにほふまでうつくし人がをりすさびけむ
 佐々木信綱博士の父君の三十年祭に
 みそごせのむかしの小松世をたほふ蔭となりぬご申せみたまに
 兄の還暦の賀に松の歌を求められければ誕生日の朝電
 報にていひつかはしける
 わがために霜をふせぎしわい松の千世のさかえを祝ふけふかな

大正十年

社頭曉歌御會始詠進

世の夢をさますつかひご村がらすかみの杜より四方にちりゆく

山帯霞紀元節詠進

うねびやま霞にゑみてかしこさになつかしささへそはる春かな

月前柳

あをやぎの千すちのいごをひごつらの煙にかふるはるのよの月
やなぎ陰たばろ月夜にふみくれば見さだめられぬ影ぞみたるよ

土筆

むしものにしたるをみればつくつくし思ひしよりは少かりけり

花間燈

星のごごはなのくも間にみゆるかなひろき都のごもし火のかけ

花宴

みそのふのはなの御うたげあまつ日の影のささぬが恨なりけり

春鳥

うぐひすにならひてもなけ百千ごりなが好むらむ花はうゑてむ

春夜琴

はるの夜はあやしかりけりこのねをめでし昔に我をかへして

撫子

あまつ日の恵ひごしきなでし子をからやまごごは隔てざらなむ

山夏月

山夏月

たか山にいほりてみればしらくもの浪よりいづる月のすずしさ
 買はれむと思ひてなかぬ籠の蟲の木のづからなる聲ぞたふさき
 しろがねの浪ぞたつなるまはぎ原月の夜かぜにうらがへるらし
 つゆふみてつゝみのかげを朝くれば草はむ牛のつゝみにのぼる
 さしむかふ鹿島やいづらこね河を海になしたるけさのあさぎり
 星のこゝ案山子

雀よりさかしき人のあつくたもひ深くはかりてつくりしかがし
 秋鳥

春のこゝも馬なけごうくひすのひこり足らねば秋しさびしも
 路落葉

又ひとつかれ葉のたちて路のへにたまれるたのが友がりぞゆく
 朝雪

いかでさはすにも足らじこあらがひていふ人にくきけさの初雪
 田家雪

ふりならず雪の廣田にすちひきて分けばや賤にいにしへのこゝ
 避寒

霜たかぬまつの葉山をたほきみの冬のたましごたがえらびけむ
冬野營

夜あらしも霜氷をもものこせぬいきざし満てり野べのあげばり

明治神宮

千よろづの若きをのこの仕へてしかむ死みればなみだしながる

雲

しらくもをまた仰がむかまさな事みてけがれたる目を清むべく

海上雲

わたつみのごよはた雲を見さくれば若き血しほの又たよひくる

妻

はやき世の人ごたもひしその人のつまうせぬてふ今のうつゝに

和氣清磨

この臣をここに擇びてつかはし大御ころの知られぬがうさ

魚

みなどこにしづく飯粒をあつまりて頭さげつゝうをのはむ見ゆ

汽車

ゆくこ來こ清き渚も見あきけむあから目もせず汽車のはせゆく

雨中舟

つゝみよりかへり見すれば江の雨に我をわたしし舟ぞきえゆく

水雷

いざなぎの神もしらさぬいかづちのゆく船をそふ海ぞかしこき

錐

まじろがぬ人やいくたりまなかひに人のよそふるきりを守りて

布

真日てるや野山のくさの緑をこりて馬をこめらがたれる布かも

頂

山さほきふさのくに原くはの木のいただきよりぞ日は昇るなる

歡聲 天長節詠進

大君のみやまひなくばあめつちにみちわたらまじよろこびの聲

丹那山隧道に埋もれたりし人々のをよしきふるまひを

聞きて

目を擧げてみれど見かねしたましひは土の下よりあらはれにけり

高田壽君のうせしを悼みて

よそながら送りし人を歸ります御ごものうちにみぬがかなしさ

大口鯛二君の一周忌に露ごいふことを

たのれさへ思ひ消えけむ手のうちの玉ごめでしが露なりしより

大正十一年

旭光照波歌御會始詠進

いづる日のはなつ光にあをうな原すゑの末までなみぞかがやく

早春野

山しろく草みな黄にて冬みしにかはるころもなき野ずゑかな

水邊梅

世の色にそみもぞするごうめの花したゆく水にかけやみるらむ

椿

ひきよちてをらむごすれば玉つばききのふの雨ぞ花にたまれる

花

つはものたむろの庭にさく花をほりき隔てゝみるぞゆかしき

ごきは木のしげみに交る山ざくらあらはならぬぞ花もよろしき

若葉さしたる山のふもごをゆく女ありかたへにしみづ

流れたり畫贊

花みむごよし野の山にわけ入りし人やたづぬる野路をゆくゆく

葵

賀茂にすむ友ぞゆかしきふた葉草今もふる屋にかけやすらむご

曉螢

星ひごつあえぬご見しはあかつきの風に流るゝほたるなりけり

夏旅行

涼しさに到る道ぞごたへがたきあつさに堪ふる汽車のうちかな

をりにふれて

見し宿をまた来てみればくれなるのすはうの花の豆になりたる

薄
夕日さす小松がはらにころごころすよきの影の廣くうつれる

野徑菊

野路こほく人はゆきけりしら菊を杖のさきにてもてあそびつゝ

松下菊

松が根のくはくの玉のつちかひてそむるかきくの色のめでたき

初雁

つはものが馬のりならすひろにはのすみたる空をはつかり渡る

あれたる庵に月さしいる

軒ばよりさしいる月のかけならでたもはぬ方もあかきいほかな

秋雲

みわたせば黄雲のはてさしらくもさただによりあふ豊あきつ洲

秋聲

かたぶける月にうそぶくわがこゑも秋のしらべこ人やきくらむ
心なきわらはのうたふかれすよきうたてしらべも秋のこゑなる

落葉

きのふより道にたちたる桐の葉の怪しやふみもそこなはれざる

社頭落葉

杉ばかり道をはさめるかみがきにあらぬたち葉の沓をうづむる

千鳥

川ちごり寒さにわびてなく聲をさかづき擧げてきゝやめづべき

冬晴

富士たろしふき晴したる空みれば青きも寒きものにぞありける

冬月

めづらしきたこもありやとふゆ枯にあきたる月の里をこふらし

冬星

むら星の目をしばたゝくこがらしにひこり面勝つゆふつつの影

歳暮祝

あらたまの年のくれまでまが事のたえせぬ國もありてふものを

巖

こみ人の富のちからもうつしえぬ谷のたほいは見らくしよしも

友

をりをりは我子の友も友とてあたらしき世のこゝろをぞ見る

友を憶ふ

残れるを又かぞへけり三十とせにあまるむかしのまなびやの友

青年

はな園のわく子がねぶり家國の野こならむまでさめずかあらむ

手

世わたりのかた瀬になやむ人みれば餘なき手もかさむとぞ思ふ

三條實美

西の海のありその波にみがかれて玉のひかりはいやまさりけむ

犬

こぞりてもいぬのほゆるにしるべする里の翁のいたくわびつゝ

稚松

たほ宮の御門の原のわかまつははたこせ見れごたもがはりせぬ

竹

竹うゑてめづる心はからやまこあひたなじきをあひそむかめや

芝

しば原をへだつる小路こもすれば芝のはしりのこえなむこする

根

百尺のたい木さゝふこひこしれず肩そびやかすした根かなしも

潜みてもあるべきものを土の上にいでて木の根の人にふまるゝ

うしなひしものを求むこ古だたみあくればしたに針ぞちたる

人しれぬ心

神にはちをさな子にはち文字しらぬひこにもはづるわが心かな

もじも山彦

たへかねていきづく聲をやまびこよ國をたもはぬ人にきかすな

航海

あら浪をやぶりてすゝむわが船にいるかの群のきほひてぞゆく

管絃
現今にはあひもあはずもいにしへのしらべを守れいとたけの道
寄山祝
あしひきの山のやま彦きみが世は口なれけりなよろづよのこゑ
門人中西文子の隨筆に萬葉集新考の事など書きたるを

見て

いかならむ人ごかひごにたもはれむあやしき書の後にのこらば
なき後に人にもかたれ身のために世をばうらみぬ人ごばかりは
義信法橋遺墨帖題詞
たのれからかくれし人も残したる筆のあごよりあらはれにけり

山縣公の薨去せられしをり

目さめずやいかに世のひごふたつなき國の柱のをれしひびきに
をりにふれて

ごもし火のうつる硯をうかがはぬ窓のつきかごたもひけるかな
人しれぬのぞみは何ぞいにしへの人ごならばむごごばかりこそ

跋

かく書集めて見れば一首だに自信あるは無けれど人々の
あながちに南天莊詠草第二篇の續として活版に附せよと
いはるゝに任せつ願はくは水火の神たち相うづなひて後
の世に残さざれ

大正十二年六月

南天莊主人

南天莊詠草第二篇正誤

二十六丁裏に夏夕とあるは瓜の誤なり

大正十二年八月十二日印刷
大正十二年八月十五日發行

非賣品
五百部印刷

著者兼
發行者

東京市麹町區内幸町一丁目三番地
井上通泰

印刷者

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
柴山則常

印刷所

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
合資 杏林舎
電話小石川七七九番
四七二五番

不許
複製

發行所

東京市麹町區内幸町一丁目三番地
南天莊講堂

書行西

南天 蘇 橋 室

本堂中書院內書一丁日之書

書院內書院內書

不	花
甲	傳
山	明
常	常

大正十二年八月二十日

大正十二年八月二十日

大正十二年八月二十日

160
168

Blank page with vertical lines and faint bleed-through from the reverse side.

